

わたくしの京浜急行研究

伊藤 礼

品川駅に行つて京浜急行電車という電車に乗つてきた。

なぜそんなことをしたかというところ、この原稿を書くためである。すこし前、九月はじめの空の晴れた気持ちの良い日のことだった。電話が鳴つたのである。とりあげてみると、『望書』の編集部であった。安心した。

おたがい、ご無沙汰の挨拶をすると、編集部は急に京浜急行電車について意見があればそれを書くようにと言つたのである。度肝を抜かれた、という言葉があるが、それはその時のわたくしだった。わたくしは中央線と京王電車の世界で八十四年間暮らしてきた人間で、京浜急行とは縁がないから、そんなことを言うのはお門違いのこんこんちきだった。だから、とんでも

ない、それは出来ませんよ、と返事をするのが当たり前だった。

だが、このときわたくしの中で変な虫がうごいたのだ。京浜急行電車には、せいぜい品川から羽田空港行きに数回乗つたことがあるぐらいだったが、考えと一回だけ大胆にも長距離を乗つたことがあつたのである。十年ぐらい前、これは品川からでなく、逆方向に京急久里浜から品川まで乗つたのである。なぜそんなことをしたのか。その頃、わたくしは自転車に乗ることと熱心で、逗子から三浦半島先端の城ヶ島まで自転車をこぎ、それから東京をめざして北上してきたのだ。が里浜で力尽き、電車に乗ることにしたのである。こういうとき、自転車は分解して袋に入れる。

覚えているのはこのときの京浜急行電車の印象であ

る。とにかくスピードがすごいのである。もう夜で、どこをどう走っているのか分からないが、真つ暗ななかをすごいスピードで走るのである。それにすごく揺れるのであつた。

電車がこんなに揺れるのはあまり出来が良くないからだろう、それなら無理してスピードなど出さなければいいのに、とわたくしは考え続けていた。電車はガラガラだったから、この会社も大変なんだな、乗るお客がいらないから新品の車両を買えないのだ、とも考えたのである。会社の経営を心配しながらわたくしはガラガラの座席のわきの支柱にしがみついていた。しがみついていないと座席から放り出されそうに揺れるからである。京浜急行電車というそれだけ覚えていたのだ。

それで、京浜急行電車について意見があつたら書いてみないかと言われたとき、わたくしは得意になつて、もちろん京浜急行電車のことは知っていますよ、あの電車は身分不相応にスピードを出したがる電車ですよ、と得々と意見を述べたのである。九月のお天気の良い、気持ちの良い日だというのにわたくしはそんなことを

言つてしまったのだ。そうすると編集部はすごく感心して、ああ、それは面白い、それを書いてくださいな。それでいいですと言つたのである。知つたかぶりが禍をまねいてしまったのだ。実際は、京浜急行について知つていたのはこれがすべてだったから書いてくださいと言われても書きようがないのであつたが、もう引つ込みがつかなくつたのである。口はわざわいのものであつた。しかたない、これはともかく電車に乗つてくるほかない、とわたくしは我が身を叱咤し、電車に乗るために品川駅をめざしたというわけだったのである。

京浜急行電車に乗つたのはやはり空が青く白い雲がふわふわと浮かんでいる秋の綺麗な日だった。わたくしが住居を構えている杉並区から品川駅に行くのは、京王電車の井の頭線によつてまず渋谷駅に行く。そこから山手線に乗つて品川駅に行くのである。

この日、わたくしは品川駅に行く前に京浜急行電車について多少の研究をした。地図、文献を開いて京浜急行電車の研究をしたのである。付け焼刃の好例であるが、京浜急行電車について、わたくしは品川あたり